

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成16年度病害虫発生予察特殊報第2号について

県内において、新たに「パイナップルコナカイガラムシ」*Dysmicoccus brevipes* Cockerellの発生が認められ、特殊報第2号を発表したので送付します。

なお、病害虫防除所ホームページ（www.jpnn.ne.jp/kagoshima）にも掲載しています。

病害虫発生予察 特殊報第2号

平成17年3月2日
鹿児島県病害虫防除所

病害虫名 パイナップルコナカイガラムシ *Dysmicoccus brevipes* Cockerell

作物名 クルクマ・シャローム *Curcuma alismatifolia*

発生確認及び発生状況

発生確認年月日：平成14年12月5日

発生確認地：川辺郡川辺町古殿

発生状況：催芽ハウス栽培のクルクマの地際部や、球根にカイガラムシの寄生が確認され、東京農業大学名誉教授 河合省三博士に同定依頼した結果、パイナップルコナカイガラムシ *Dysmicoccus brevipes* Cockerellと同定された。

本種は南西諸島や小笠原で発生しており、特に沖縄ではパイナップルの重要害虫である。本県本土での発生は初確認であるとともに、クルクマへの寄生は国内初確認である。

なお、平成17年1月現在、クルクマにおいて新たな発生はみられていない。

形態及び生態の特徴

形態：雌成虫は広楕円形、体長3mm内外。ピンク色で全体白粉で覆われ、体周縁のフサ状口ウ質分泌物の突起は比較的長い。

生態：卵胎生で周年繁殖し、常に幼虫から成虫までの各発育段階がみられる。沖縄における年間世代数は6～7回、繁殖適温は23～28℃。室内飼育試験では、20℃で成虫・幼虫ともに死亡が多いと報告されていることから、冬期の低温は繁殖に大きく影響すると考えられる。

また、本種には雄が認められないことから、単為生殖により繁殖すると考えられ、アリの伝播の役割を果たし、繁殖を助長すると報告されている。

寄主植物：パイナップル、マンゴー、サトウキビ、アレカヤシ、クチナシ等多食性。海外では、ショウガ科への寄生が確認されている。

被害：クルクマでは、収穫された球根への寄生が確認されたが、吸汁加害による地上部のしおれ、球根の腐敗等は確認されていない。

パイナップルでは、主として葉の基部や稈鞘、果皮の隙間などに潜入して寄生・加害する。パイナップル栽培地帯では吸汁による直接害の他、萎凋病の発生と密接な関係を持つ害虫として重視されている。

防除対策

- (1)花き類(草本植物、観葉植物)で本種に登録のある薬剤はないが、地上部に寄生している場合は花き類(草本植物、観葉植物)のオンシツコナジラミで登録のあるスプラサイド乳剤40などで同時防除できる。
- (2)本種が寄生している球根を植え付けない。
- (3)発生が認められた球根は、ほ場外に持ち出し処分する。

引用文献：河合省三(1980)日本原色カイガラムシ図鑑．全国農村教育協会（東京）：pp.455
東清二，大城安弘(1968)パインアップル害虫の生態と防除に関する研究 第1報；
パインコナカイガラムシの生態．琉球農試研報 4：51-56

参考資料



パインアップルコナカイガラムシ雌成虫
（日本原色カイガラムシ図鑑）